佛書

中村俊定文庫
文庫 18
757

うちよせ岸波ふりけるやいそちとり　錦文安
蛎殻乃山色よりくやいそちとり　亀車
よしやゆゑの高うちとふ絵ふ磯子島　文賀安
声高く笑ひ面白ひ向けの磯ちとり　舟東
別荘よ酒の肴さえや磯ちとり　素磨
風乃波よ参うちよせういうよりる　如水
言葉や歌ひけぬうちを仙女子島　永之
波の音ふ声人をやらるひ磯ちとり　文栄
多多ちとりやゆゑのいそ烟　涼山

よしや波とせとふ睦むやいろ千鳥　琴安
女男乃浪ふ別島お客を磯子る　素翠
多き中ふ島むハちとり磯法雪　丶
磯ふ陽てなくくとをとを汐時を　震外
むき拾ふ子とろ〳〵やいろちとり　仙鳥
蔵きりふ参よい陽ふし磯ちとり　一秀
千島ふ磯やゆ岩ちとゆきとも　素蓮
風をゆちとり参とゆふきの磯ちとを　些山安

川千島

小社よりし義法けう和川千島　冬典
鈴を鈴も分春むこーや川ちとを　時磨
さき棹ふおと後記ゑ川や川衛　涼山
秋も春のうなくくや春の河千鳥　琴奏
宗鑑も森さめ金沼乃かちとり　仙鬼
宇治夜ハ秋をなしふけて川千鳥　静雨

夕涼鶴

笑人を芳の屋てゆ夕ちやゆ和　其葉
枯芦や夕ふをちとり風鶴く　玉英

竹乳をと呼ふ人をつを甲ふを鳥　連車

朝千島

巽守乃浦てきくやつさちとり　錦車
島かくる雪を花ふ胡衛　蒼洌

極夜衛

亜亜和の白きハ蛭田金さよちとり　亀幸
荒磯ふ森うよてあく金はよ衛　蒼海
宇治橋今青ハ燈ふ接秋ちとり　麦徳
けし守を食や加ふ除さよを鳥　玉英

友千鳥

ちどりと月は中はし友ちどり　文賀女
月のこゝろをあるを友とゆゝ　素玉

千鳥

右左橋ゐをくゝ所千鳥外　錦文女
鹽小舳ようふやちどり船子低　升東
ちどりやあるの月の光りの風とゝもに　雀蟹
月おちし淀堤外や霜千鳥　素磨
あるきく夜毛千金を酒の友　如水

耳もとゝあるなくらふし　浮市堂　永之
一むきの千鳥やゆ風ふよをもゆれ　文栄
かゝゝえなくや中良の淺乃新御　亀龍
こゝふゝちきく日や風くゝあるさゝ　丶
目のさゝふあるの雲や遠眼鏡　呉龍
ゆけハ引潮を毛汐小所ふちゝゝ　玉翠
陽汐や入江〳〵毛かくちゝゝ　一秀
入毛の風やゝかゝふきくあるゝ　素隣

千鳥足

年ふるまつの夜をやちよのしの子ゐ足　崔嬢安

浪ま隠ふ所程くまもしの千島ゐのし　龍人

引汐ふむこうふやゆねもゑとらめし　霞外

春乃千島

旭日いと沖ゑくかちこふ千島ゆ　春裡

混合

水うちを安めく夢やむら千島　素兆

隈所ゑもきの月ふ出むゝ子ゐ　龍外

多ゐむもゑ筏ま棹のさし加減　虎丈

子ゐむきゑ巴ふ波の文　都翠雅

ゑ紀折うち月やさし出乃演子ゐ　逸外

夢見由ふちとゑ乃数や備れ月　花外

ゑちとゑ風乃城衛　素梁

沖ゑきゑ夢い世子島ゐゑ毋　春朝

酔立ける旅神浪乃破ちゑめ　素粒

汐やさて夢ゑまゑふいせ千島　義粒

夢浪ふ沖ち破ちゑめいろのし水　素塵

うかきゑて杉山ゑゑ所沖子島　龍簑

江の一面や岩屋のかなへ沖千鳥　意悦
海豚をやをり四葩戸の沖ちどり　素登
山や木の葉沖やらすもるを葩を風　寛之
雲ゝ波ゝ月さゆる松や島ちどり　侯復
松ふかるる見こしの島はの利根　嬰周
ちりと岩ふる島ふちとも一門も　仙里
ちちはやハ十島翔ふるちやり利　社来
引汐ふるつもゝ川きちゝ栗　可充
月の夜や西の松をも遠千島　布外

六

美をを却ゝ後や喜ちゝ　千朝
曲ひなりふ申ゝや川筋喜子ゝ　田社
船よはふかふふ子ゝやあきの川　女浩
三法ふちゝもの沖や四条川　舊香
山色ふふ子ゝるや岩家北六井川　蘭陂
荒海のきりん虫ゝ川夕子ゝ　千来
風を吹ゝ其加茂川もゝちゝ　暁柳
帰や夢ゝ何ゝ波乃夕ちゝ利　英富
何も苔し笘屋をきむきゆふ子ゝる　親外

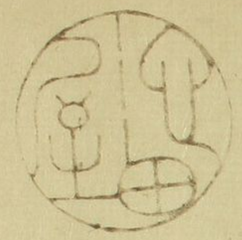
撰集ふけゆく夜や挑灯あるか　素行
稲荷の灯乃色さむし挑灯千島　亀流
隣沙や花ふちの紀挑灯ちとせ　藩山
神詣ゆ口をい乃やさよふとり　遥徽
輔ふ森く百夜もおぼしさよ御　鳥孝
島守のまくらの御をはよちとせ　女賀重
子をゆ笑うむ妻ふ乃はよ花　花丸
妹うとふ蕎麦湯もおまつはよ御　今香
笑ふ乃の涙ゆく乃挑灯御　末英

翼ゆやいく夜庵酒のあちゆ利　春仙
人玉〳〵嗚呼夜ふねのやまふる　五討
浦浪ふうらなる紀孝やとを千島　世義
ふるなくや一の棒ふも耳乃嵩　宜秀
翼守ふ風記くちとやふくちう　奇峰
安治川や蕎の背中ふなく御　素周
千島志ゆふくや松明の蕎ゆ後　壮時雨
なくやちうう永の旅人皆目さん　征鳥
桃もとふ夜ふ乃を峠ふる　栖花

宮き松か柏子や住けてなく鶴　鳥朝
赤けや千島淀の面影か森ハせぬせ　斗溟
なくやもの浪子森ぬ松のまゝけ初　花慶
帰ちと利蛇も耳をさまさる糸　秋策
声ゆう比く奇の潮やかくちと利　百我
家くやもの清もと夷か跡ゆ意　虚外
宮治川やあをせんくなく千島　茶粒
玉川や月か影ちと利のお思望の除　金馬
おかし伊くやもの寄も一くま　雨簾

あくく千島きく松を磯よの浪ちら　袁轉
茶あくくちつまつ松や帝子杯　意外
金沢や其ふとゆの江ゆ子や梨　雨橘
さくあくや子もを志賀のうやたる　五蝶
かまくらや祐成の面とまふちくや　昌舟
子もるさく定めお紀彦や次广矢島　夷逸
うり浪か風乃羽の一茶ふ子る　為有
風宮し子るきく松を青あうら　袁彼
千島巻のさむ法きくほや波治　袁克

手ぞきくやゆゑおぼしてゆゑ夜　調布
花うふやちとせいく節琵琶湖　在泉
ぬるあの間をうとかるるこの郭　白英
風か碓ゆてゆゆ田むを磯をちとを足　観魚
大盃乃波か由まてやちとちのし　言外
妹うをを碧提灯か千足あ——　廣富
海士の子ゆあ抜ひやゆ波か子るかけ　壽溟



春

鶯　露　霜　雪　枯草　千鳥　雁　蓴　むとひて　夏之
時鳥　むとひて　夏也

○鸎　鶯　双書也但鶯の方正字とも云吳名。黄鳥
○英　鸚　○金衣鳥。哥舌　此外数あれと畧之
本草綱目諸書を引て云鸎八項乃佩也紫頂文
有故鸎小従小或鶯鳥と作も体毛黄色羽及ひ尾小赤
冬捐ます所眉毛皆尖て脚青く形鸎鳥に似て大ち
く雄雄双ひ飛也音八畜潤ゆ織機乃杼の如し
月ニ八田塘の中小蕊蕾して泥を求ひ小らつむ巣卵の

始し奥ゝ出てはじめて出愚云　本邦の字久比須を
篤貫分吳名も文字を仮るゝ而已うくひすを兼る事ハ
石川丈山貝原篤信新井白蛾等の識者のさゝるゝ所なり
されと右郭公又子規の系下ふも考るせし通ゝ其ゝのいハ
白論字連の書ゝも用ひさせるふ文字かれハ物産家
と違ひ只公得ねる事と為ふへきせ

○白ひ島　藻塩草　山里ハ雪きえそふゆかひるむ花ハ
おりきふ志るを云ら紀はゝ

○花見島　花玉集　和泉式部家　奥ハたゝゆゝなる形

山里の影ふ志て志ける花ふ

○ゝゝめる　和花抄　公忠家　ゝゝめるまゝ行なく也我
やとの八重紅梅の公ふゝちらし

○はゝゝえふ志る同赤人家　このきねはとふさゝえふるよゝも
ゆきて常ゝ我人去のまふけふ　さゝえふ島やゝを
常ゝの船ゝうくひもも考て八さゝえといふ志るふなる志ゝと
さゝえふ志ゝとはゝゝく庵

○奇よゝ志る詠　古今序ニ篠ふ家くうくひを水ふ志む蛙法
和のをきけハいきとしかけるものいつれゝ家をよまるけ

○経よみ字の様 ちと和のやうけ経と仮名あれハ成べし
○寺家こゝろ日いつれの李愛も墨字ふて出 愚云黄なふ小ゐる成べ
○青島 左傳又まま木枝に後成々愛 英の第仮のゐふ常の
まき矢ゐやたなやたはしめけむ
○人来島日 古今まき人ゐらく 梅ゐ人ふまうまつ事常ゐ
云とゝゝくといとひしもをる
○めふてふ島日同左のおかいまうちきこの歌に常ゐ乃ゐ
めふてふ梅のちふ折ゝゝん者ゝまるやと 英紙抄
見ハ彼ち島に青柳をゝ来ふちち常のめふてふ島ハむの

島の用と云事をゝ中ゝまゝあるゝをのゝ乃桜ふこゝゝひ歩行
をめふてふとい八柳の系ふ梅の系ふ島をゝ中ゝ也
○鶯 檢 濮陽傳カ詩に常ゐ接織 韓 満山青 宗祇連歌垂句
うゝひしゝや織てふ和のあやとゝう 愚云上に如ゝ前の
吳名の内人来島めふてふ八いまゝ人ゝの系愛ゐされ
と歌ゝゝゝる猫ゝゝゝる葉ゝ き類ひたれハ通俗ふ儀ひて
実に載ゝ又紙云の常の句も。いやゝ有るとせハ右の詩の
云ふ通ひて吳名の一つゝ成べくや 又云人来名様
てふゝるれあやゝゝる山ゝハ已ゝ極むるとふハ非次唱へ来る

而と當る後の作例を出すのミ屈伸おらるべきん

○鶯乃琴 抜 ○鶯琴云く曰 李吟増山井 貫外にも出

但今世琴云きゝたると云ハ通俗う我との実名とも當ずまき

むかハ句作公得あるべきん

○鶯笛 抜 早き哨山井ニ云 粒草子ニ春亭ヶ家との笛ハ作

ア吹のく愚云さんと貫草子ニ乃ゝえ云実ハ実ハ有るん

瑞川次郎百首 後拾遺 青竹を雲のうへ人吹立て

実の鶯さえつらしを也 又今も是拾い鶯貫外の句法

音を吹笛を青也 李吟の云ハ見ん 但右の実ハ別実也

十二

○春鶯囀 楽の名 実録抄 実ニいつの又おちく欲へき鶯の

さえつるとうぐいす愚云とのの笛竹 ハ乎あれハよあ囀ハさえ

はるとよむく愚云古今よも笛竹の胡竹とよめるこちへ

来るふうけてく

○正月花鳥 柳鶯 定家公実ニ実来て八歩日もまきあ

紅戸出ようくひきあるを愚乃むら竹

○百千鳥 ハ多数をきゝたるといひ又鶯の一名といい諸者の

説て匠也句福古今ニハ三鳥を伝授の内也又百千

の鳥とうく雑くまきえつるとハ実欲へし

夏

○鶯の音をへ　五月七十二候の数に七種後の五日に当る
反舌反舌八陰のおき鳥也　月一陰生る故に其陰
を止むるを　愚云反舌もぜひとうくひすを
とも別也いつまでも書をいるる時分

冬

○鶯の子鳴　十月　愚云小夾の中ごろのある日小音小さい
ちよい〳〵と鳴但子のミ非次親鳥もなくまねを
して鳴とも云　陽気既近者故なるべし

雜

鶯の糞　大和吏木西行ゟ二笠山夾を去ること
砂をあ〳〵くうくひすの糞
○同名山城綴喜郡作山在山列名跡志に名我不考と
○鶯袖　秘蔵抄さ衣のうくひすを袖〳〵もぬ通し妹をうら
そ　おれる涙小又同抜小大君宮に勝の女の山田ふもと
乃ゝ菜つむうくひすを袖をぬらしつゝ部　鶯袖と服紗
きる袖をいふ也と愚云已う壮年の比むうしたやもりとて
老人の服ふたゝ〳〵ぬぎ袖をせうくいのとき

形也よりて守名あるをせうゐを當るとの唱も大和初と
いふ古き仮名草子にも見あれハ池とハなるけきと
いひ〳〵とかの事也又別也

○鶯塚　山城菖蒲那山州名跡志に未不詳

○同名摂天満に在摂別難波丸に昔富家の稚子當を愛し
せしの丈児死しるを鶯も死せよりて塚となせりと
外ふも中き塚に此名あるを粧可尋

春之部

鶯　初音

うくひすや別荘守へ先つ初音　亀幸

鶯も百姓の日和見つる音か　亀龍

宵の比次の初音やまふけ物　輝月

訪ふ人もうくひすやむ先乃やと　春裡

鶯

うくひすや校こうこうと朝日新　錦交女

鶯や外側乃障子ぬるゝ家乃め

[illegible]
うくひすを[illegible]
うくひすや[illegible]
[illegible]
うくひすもうくひふや所[illegible]
陣子[illegible]ふうくひすの尾や太刀乃鞘
[illegible]
うくひすや[illegible]
[illegible]

素磨
、
如水
永之
尼人
文栄
、
吳龍
、

空やよひうくひすもとれ梅を[illegible]
[illegible]
うくひすもやる入乃恵を耳ハ今朝
[illegible]
うくひすもやる[illegible]
うくひすや[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
うくひすもすの梅[illegible]

涼山
其葉
琴泰
、
素德
素隣
霞外
素翠
、

うくひすや腰巾の耳を出しし時　玉翠
うぐひすや蝶を誘ふ花日和　仙鳥
誉乃者や布巾中乃嘉城のもし　一秀
柳あるてうくひすなく鶯の　〃
うくひすや高あ陰月日星も今　素蓮
白雲乃引伸し色変の茶　蛙山安
うくひすやひの枝となひも砂らとて　連車
歌よみ島
片言法師よみ者を可考らしし　文賀安

十六

梅小来よ世を乗よむ島ならハ　升来
白雲乃柳小よむハ出欲花　雀嬢
うくひすハ梅の蔭ゝや加枝えうゝ　如水
紙ゝくゝや片はうくひすの家貸　永之
竹ふむ竹し家よゝ島や笛小者を　尤人
うくひすも懐旧やよむ一乃谷　素玉
笠小屋ゝ旅うくひすや家アゝら　仙鳥
家よむや西行谷を島を多　玉英
誉の清よゝ如者やをんか家　静雨

経よゝ島　亀龍
法華経もゝる八幡宮　神路やま　蒼例
急ゝしらし　鶯よゝとゝ　延山

きかと島　錦車
もゝ社木ゝ　素ゝ　遊ゝ　霞外
雁ゝ乃ゝ　名乃ゝ　ゝる　きかと島

花見島
よめ一首　ゝゝ　花せゝ　花見ゝ　亀幸
妻めゝゝ　古巣を出る　岩見島　文賀安

朝かゝ　かゝさて　梅法　岩乃ゝ　素秋

金衣島

李夫人のはうもかゝやきんゝる　錦車
おのゝの名も浪の名ものや　今衣る　多典
きゝかの称の名やきけてめきむゝる　雀婆
鶯ふゝらゝ　價をし　雨しきむ衣島　玉英

夏　鶯音を入

うゝゝの音を入ゝ乃や　梅きし　多典
鶯法音をふゝいきゝむめ　井雨　外来

きりぎすの音せし梅ふらんぐるの吹きやうの
雪もまだちりかねて皐月なるや　素秩
　冬鶯の子鳴　時麿
うぐひすの子なくや冬の日向かな　素秩
夕日よし空の氷も爽ふるむ梨　凉山
うぐるの吹や弗子乃音も男山　蒼洌
　混合
うぐるの吹のきつねや赤き日ふ傍ふ　宜秀
雪のきりぎすの音やうぐひすしろ堂　視外
　　大

うぐひすや音も乎記京今北京　京香
空の北斗乃音も鄙めくや大津うら　舊香
うぐひすの音やかよ弗の底ちうら　女蘭児
空の北次や篠を簾ちうら胴上る　意外
法け無花を呼梅の篠鶯　廣富
うぐるの吹や篠よ胴ちゃ梨乃梨　素粒
うぐひすや日ふむく枝をちゃ雪の鳴　右外
雪や爽のきりぎすむ北を帰くけて　為有
うぐひすやむのしちうら乃崇ふなく　素綾

うぐひすの乃ひくと晴日卿か　喜悦
うぐひすや耳住よし乃松はなく　白英
営や日本さ使ふ志の使や　観魚
宇久発次の夢のときを仕まふさ屋　素周
うぐひすや一志ひくか校うひさ　尤外
鶯の夢か角ふし朝日かけ　安賀重
うぐひすやむめこの旭か毋わか夢　尤簾
うぐひすや西なるのら日乃ひる夢　寛之
営よ邪广か志ちら如か志めふか　秋策

九

宇久日次や浦舞酒肴浸の夢　五計
うぐひすや三光乃志の梅か思　調布
発梅を追のけを申けうぐひすも　素轉
営や梅うぐひすかの屋ふむめもと　素行
うぐひすか振むけハ形の梅ゑ　鳥朝
うぐひす紅次や築墻の梅も悩ら　素塵
うぐひすやほうかつまと梅日和　春瓜
素意ふ乗むめを営かうほう　花慶
うぐひすの舌やほうと伸む夢　義粒

うくひすや霧うらかすみ雲隠れ　英富
雪やむ色をうしなふ霧くれく　春朝
うくひすの時雨まぬ色や霧のうらも　暁稗
うえぬ沈乃そね題目や碑うら新　夷逸
宇貝沈寿や釈迦か絶よむ暁城の爽　蘭陵
うくひすや元政この庭か絶とうさ　遠瀬
欲やよむ梅ふうくひす筆とらせ　虎丈
うくひすやむめかにきかふくろ　社来
うくひす寿よより飛とよむうやまとふ　在泉

洞くきくも欲よくく島や糸　女中
音乃うち海と解よや砂糖のきかこ島　女糸蘭
島よりも蛍粉のかくを黄かこる　征鳥
雅ふ言かたくこのもを抜きなとうう　言外
形もよ一杯をもく抜やさか見島　田社
とめられつ梅う笑新ふ尚ん宮刑　侯昌
さくや梅ふもう田糸をみひうう　泰梁
うりまなくやかとも梅うう白ひうる　嬰周
梅とを夜ア梅さこのも寿メれふひ島　穀雑
逸外

琴の音ゆゑ三ツ乃紅のうへや金襴の
山路乗る姫初しものきぬ えを
ゆ音今や價何千金衣鳥
赫奕姫もうゆゑ蘇合香
琴の調べ一領巾ふゆ山色重衣鳥
人形の衣裳色のしやきん衣
うゆもも琴ふ合ふ音や張嫁の奥
琴ゆきふ乗る色ゆ松のえ
うゆ紅ゆよ留何をゆ汝このたまうから

社時雨　女
鳥孝　詩
花外　沖漠
千朝　寿漠
金馬　花丸

北一

うゆひたやゆ命も乃ゆ如舌法の八
うゆ紅彩やいゆ起ゆ乃耳果鼓
雪や夜戸こゆら耳のかゆこのゆし
宮乃ゆ沈ふ惜しゆゆの桔梗
奕孤ゆら代朝八隣のうゆ紅沈も
うゆ宮ゆや仕粧ふ明し恵のさ記
うゆひたを追ふ流ゆのゆる行祈戸
雪やゆ月ゆ一ゆゆくのいゆきく
賞や宮しもあらふ月日星

素兆　亀流
素克　可充
五蝶　蕃山
世義　栖花
壷外

うぐひすの千段ふるまふ春の夕暮　雨簾
其ちるは隣もあはれやうぐひす茶　朱粒
うぐひすの鳴もきかぬいふ間のやふ道具屋　素久
うぐひすやたれ乃君は恩沢の恵　千来
うぐひすや雲の中の長者の丸の朝日うけ　百我

夏

蛙乃音やいれふ来る箱根やま　奇鳳
うぐひすやまくも夢の若葉山　木英

八重や桐うぐひす柳見せ芝　仙里

冬

うぐひすハ分延法谷を冬一夏　雨橘
うぐひすハ冬の日の紫よ申きり枝　昌舟
蛙や冬をいろはふほうも出沢　素登

四季詠島上巻追加

夏

○三月はなぞ島　秘義抄異至歌　ちぎれる雲ぞ
ゆくえなきかも　おもなし　新のうつきなる
さくら　吳谷あり　其中に　かくきはとハ　あいけし
　　ちらハせる　うつきなる　おまきて　利
　　秘なる　谷　四月　月　ゆくハ
三月なる　也　器文

附録

一陽井素外

鶺

時雨ゝら　ちくさの　ゆゑ　やむら　御
雲きて　月　ふさいく　村　千島
治演や　ある　時　地　ふむら　ゑる
ゆさふ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
家明寺　殿　芦　火　浦　ち　ゆゑ
敦盛　乃　塚　ふ　来　な　ゆ　猴　子　ろ

八〻の京小松ふや湖水の磯子鳥
みくらゐはやさし出乃磯ちとり
いく十文字ふむや千潟のいそ鶴
姫松や海棠ハ紅葉ちとり
風乃子をふけとる松ふ磯千鳥
沖蒼る日や田畑を磯ちとり
原小路をとふや堅田のいそちとり
風小清きてまふや蒼る社濱鶴
雨も出るら契乃ふ砂や濱子鳥

磯小松の麦蒔き日や沖子鳥
帆風乃帆や遠ちる沖ちとり
繪ハ富士を昇る旭乃沖ちとり
村雲乃千鳥乃麦を月社前
月を沙もちちく千鳥の麦蒔し
月落漁火半ばて個と鳥子鳥
日ふ小亭下田ふや叢鳥ちとり
かの〳〵と明石八鳥海子鳥
入くまさ日八何の〳〵潟乃千島

海あれかふ秋や宮ゝら沢崎ちとせ
姉ハ遠廣を夕波ちとう君や東沢
ちはハ木葉崎を手ゐる元禁河
川ちとう紀乃風とゆくも夜や
人ハ群ゐ時や四条乃川ちとせ
淀舟のゆくんやうまを紀接夜衛
よゝゝ船や君ハ舟ちふきくゝゐ
船ハ使西牧方ゐ夕ちとゑ又
手ゐる伸くや来るや石川安房上総

治富や烟の雲ハかく千鳥
手ゐるきくゝ秋ハ脇らし琵琶の湖
金松手ゐ島きく秋や揖まくら
旅舟ハ宮ゐの手ゐる笠ふとて
平家嶮ハ藤海も次摩のちよゐ
ちら猛の芦を南辺や接夜衛
鯨とまし潮静まりてさよちとう

鶯

うぐひすハ新玉乃玉の玉乃声部
鶯と紅ふ毛帳使鳥ハ花を
きくや弥よ毛ふ鶯も初ねの日
夷ハ来ふ毛ろと鶯よ毛毛伝
鶯の初ときく初ゑ法華ふ毛
うぐひすハ玉ゑ毛ケ強ふく毛経
うぐひすの一声ふ毛をつらぬ毛ろ
鶯や丈なる声ひを毛分の舌

鶯流古名やゑくのあやをなを
うぐひすの乃声のふまろ和月かを毛
鶯のふ名や仏盆のふ紀かなん
うぐひすや声引ま乃二合毛の
宇ゆ比毛の初ふ毛くき日和ふ
ちゝにふ毛鶯ハ青乃優なら
鶯の音や揭幕ふシテ乃出端
うぐひすハ乃青ハ毛入ふ樹屋ら庭
中我ふ毛鶯ハ音のうゑゝ鳥

鶯の音や長を説短をあく
うぐひすの音や初風と相小峠
鶯もほめる花のうぐいよん天竺
昇る日やうぐひすの音も大きやこの
鶯や音ハ月星小日の出今
鶯の音や四川乃日はーを
鶯や蕎小伸さを義乃夢
うぐひすの夢や柳のうハさく全
うぐひす夢や柳も黄をむるふれを

鶯や梅小寄かけと音を柳
鶯のうぐふ日和やむ花の代を
我庭乃梅ハ鶯めつらしう
うぐひすの音ハ岩れ見えぬ影の梅
鶯ハ姫や見えぬ峠を梅屋しき
鶯を聞むれ庭く宮小島乃新
鶯を仏の耳を梅を雪を静め
野中ゆて鶯きくや梅あるを八
うぐひす音ら山乃郎を梅乃園

倩掌よ伺うぐひすを枠の梅
咲や横うぐひすと称乃時節
豐小和らこのむ鬼とも未と
うぐひすや社頃小耳の胡蝶め
咲や見さそうやてても春陸島
雨も爽うぐひすもぶくや快く
うぐひすや名の釜のとろ〻ぶ金
我家のうぐひす名月多ゆや時松
うぐひすの音や幽篁の裏乃琴

宇倶日浜乃あたまこすもゝ谷とう
嘗の義小ちく音を示屑を
胡ぶく医者の嘗義ならん
うぐひすや義他ぶても京れ音
好小珠なく義ぬけ嘗徒云を
吉小爽の光ぶも見えう今衣多
聖も山と云ぶく時や茅ひ島
英月ぶくてめはすきくやこめる
群て未ぬ花のまへと云見島

出うけしか谷うつり里へ花鳥
鶯乃音へ　夏
岩ま嶋しゝ鳥とのいと沢年月ものゝ
和月ゐて経ものゝ八夏義を
物の隙こゝ笠やむせて書を入る
鶯の子鳴　冬
うくひすの小倍も経を今式に
子なく貫母うくひすい来まくも

月雪花鳥八年〻四ツ乃時の目ゝ
耳ゝよろこはしめて云の紫式妹と
かれるもの兵部卿宮うる八又素性
素乃心ゝの詠を集め侍む
とおもへ
うくひすもよろこ沼てをけ寄袋

寡不此差師の撰め所四季津島宴曙の一段小
告て先秋夕くまた法小田よ落来をいる枝梅さめ法
冬北岳ともれる河を窓の雪小かきのつめて稲せし
山里いうて爽を志ら海しとくとこの一月、吟しほく
笑まれしこのくや又憂来小々ら し世 校合せよ業を
花外を倩さむものを詫せら所よを師命よ隨ひ
其事を伏て志ろしまつる述侍法八門人

一萬井素粒

か北元年うの花月

照月次追補

○月讀神 月夜見正 又月弓正 但月讀の森ハいせの名所之

○月人男。桂男。左佐良桜壮子 此外 壜嚢鈔の説ハ

いつまても只月の名と公得へき事也

○月の都 月宮殿の事也 ○月の出没 月ハ没の

満干と同し事なれハ月の出る時さを没を没を

云但月の出るを出るとハ入の字也是ハ悲の辺

○虚弓 弓の形 ○玉鉤 鉤針の形 ○蛾眉 眉の形

是ハ月の意なくハ只眉の事に過へ又蛾眉山ハ地名也

。月の鏡　。月乃新　聖廟後集に月の新は鏡の似を
羅を明らかなる事はし。玉鏡　。破鏡　元亨
月　七日八日の月也又殘月ともも
。月乃弧　舟の形　六日七日なと万葉集第七人麿歌に
天の海に雲の波たち月の弧星の林に漕かくる見
。月の桂　酉陽雜俎に月桂高百丈下に人有てあれを
伐は呉名は劉西河の人仙を学て何やまち有謫て
樹を伐しむ。月の桂乃花実　温故日錄に式抄物
云後撰に夾雪ちあるあいきかりうくるる乃月のかつらの

花や咲らんとよめるは仏教にて菩提を実と
桂は実にして秋と詩にも実を秋に定めて紀
物也但古今に秋来れは月の桂のうへはある実とも
と云なとかりもとと云ともは好事ふかきうへ貞徳
法華経を玉鏡と号流通俗志に月の桂乃花実
菩提樹秋之又桂花とかりも秋之花は未擇也
。玉兎　張衡の霊憲に曰月は陰精の宗積りて獸乃形を
なす兎は陰類也又あしのうら波は蛇の伝書に引て
委くしるせりとあらは其書を見るへし

。嫦娥 恒、嫦、素、仙、。月の桂 月蟾

いつまでも彩あり光をむすぶハ月のなを色又同書ニ

羿不死の薬を得て妻恒娥ニ嫦娥を盗て遂

奔て月を月の源也を蟾蜍と云せん老よハ墓也

月の異名ハ玉蟾と者又論語ニ羿ハ射をよく也下略

。月の桂、蛙、蟾 王普曰上ニ出せるく云ハ日月ハ境乃

あとし位て大地の影其中ニつて高くハ事也と

。月乃霜、雪、氷 月冬の事なれハ陳拙ハ色

源次秋也但月の氷ハとしてハ辺也冬之

。月清る 但酒るの文字を出ハ夏也

。盃乃影、光、李白詩ニ月光長照金樽裏又曰作ニ

明月幾時見把盃向青天愚云連歌ニ月と者

るハ此ニ月きの縁語をもてなし

。月乃影 月ハ客を招くあるし

。月の宿貫家之

。月の夜家舎ニ又月歩の友

。月を友月を友とす

乃ハ乃也 。月を宿 月ハ所宿杯

。月の夜家舎

乃ハ乃也 。月をあるし

して月をあるしと月を宿とする也杯の下張を宿と

せハの花の歌の意ニ等しよく心得てよむ

○胡蝶　日双しの園。夕つく日　見殘月と夕月乃
日ふむひなならぶ哉八月と秋て秋也又胡蝶日つく日
とそゝり八秋の日のうすて非月但双しの園八山城の名所
○月次乃月又寺号又名所ふの月乃字ニ彩を光を錦
八月と成秋とあく面の月をも持之
○月日の篇　大集経ニ昔八二ツの猿ありて遠き菓を生取りて
井中ニ流る拾るふ正白の篇鱗八明　其菓をかんて狩ふ
きれ〳〵とを信ふ四蛇ありてふ三蛇ありて作きうまを二象
既井ゆふ見ふ危ふ井限りて折ふ蜂のうとるみる

其蜜の中ニ落てふ中ふ入ば人蜂蜜の井きふ落て
ゆて菓きを井中ニ落入て身の終る事を知次ニ月日乃
走ふくを悲れさるを恵を無常の譬也後成ふ家の集
我ゝのむとまの根をもむ篇抜と思八月の恨しき
○月草　見ふ赤彩を光をむ思八右面但鴨跖草の事之
○絵の月　○細工物の月　夾の花ニ倣ひて秋の月とも

雜

○心乃月　胸の月　真如の月　はら雲晴て月を見之

但秋ノ也

○星月夜　詩ニ星ノ多キ月ノ如クナル事ヲ云

いなり八秋ノ面乃月ヲ指シ也　世流通俗志ニ

ハ雜也　悲月ハ但漢金山ヨリ金ヲ

時ハ名所ニ夜分天象ニ非ス

異成花追補

○花真壺　古今集ニ岩乃絵ある壺ヲ云トイヘリ絵ヲ

かく岩ヲ流ル〻奥ヲ持ル壺ヲ云ト我

○花瓶　同書雜也ニ出ル右貞徳の説乃如く瓶ヲ花ヲ佛ニ

供ル也あらハ

出ル世流通俗志ニハ愚云　あまを岩の波ニ

出ル　と増山井ニ倣ひて安ヲ載ル好ニ従ヒ

雜

○ゆ　火乃岩　○花ゆ　○岩かいら　紀刀の鞘ニ用ル

鮫の皮也通用梅花皮(カイラキ)と云

○花かつを　○清くもの名

毋せ一名ける分　西花とも所樹細ものらせ

○浪乃花　浪をもとりてる人名の波ハ夾季也西なと

○岩世中と衣　大概茅花也但句によるべしと我

○清じら岩夏清金華に赤き性子を云つべしら岩ろと云事と

はめ月の集ハ縁其題を挙て句を撰せを人らの需め

無き後て岩雪の集を著せ右月得花の中も用ひ

ものべき類の洩るを寄ホ補係伝る而已

中村修定文庫